



Title	『源氏物語』帚木巻の享受：鎌倉・室町期の源氏学
Author(s)	川渕, 紗佳
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 38-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』帚木巻の享受 ―鎌倉・室町期の源氏学―

日本文学 博士前期課程1年

川渕 紗佳

はじめに

『源氏物語』は成立から現在に至るまで広く享受された作品の一つである。様々な時代で愛好され読み継がれてきたことは、周知の事実と言えよう。

建久三年（一一九二年）に開催された『六百番歌合』『冬部十三番の判詞において藤原俊成は次のように述べている。

紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、そのうへ花宴の巻はことにえんなる物なり、源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり

この判詞から、鎌倉時代初期には、歌人の教養として『源氏物語』の知識が求められていたことが窺える。当時、『源氏物語』は物語の枠を超えた存在になっていた。

一方で、鎌倉時代頃には、時代の流れに伴う文化や言語の変化に伴い、『源氏物語』の内容を理解することが困難になっていた。そのため、『源氏物語』の難解な箇所解説を施す注釈書の需要が高まり、鎌倉期から江戸時代末期まで、数多くの注釈書が作り続けられた。この注釈書の内容を確認すると、文意・文脈を解説したものや、伝承的な内容を説くものなどがある。現代の解釈とは乖離しているものも多いが、当時の学問が劣っていたとして看過するのは早計である。むしろ、当時の人々の興味・関心が、現代とは異なる部分に存在し、解釈されていたという事実は、『源氏物語』の享受を考える上で見過ごすことのできない現象である。

本発表では、『源氏物語』帚木巻の享受から、鎌倉・室町期の源氏学を再検討する。

帚木巻は『源氏物語』の第二帖に位置し、光源氏が中将であった頃の出来事が著された巻である。第一帖の桐壺巻では光源氏が元服にいたるまでの出来事が中心に描かれているが、光源氏が主体的に行動し始め、具体的な体験談が語られ始めるのは、帚木巻からである。前半部では、五月雨の夜、宮中の宿直所で源氏・頭中将・左馬頭・藤式部丞によって女性論が交わされる。女性を三階級に区分し、その中でも中流階級の女性の面白さが語られた後、光源氏以外の男が過去に関係を持った女性との体験談を語る。この場面は、後に雨夜の品定めと称される。後半部では、光源氏の恋愛譚が語られる。光源氏は、方違えのために伊予守の邸を訪れ、彼の若き後妻、空蟬に興味を抱く。中流階級の女への関心が生まれた光源氏は、彼女の寝所に忍び込み、強引に契りを交わす。

この帚木巻（特に、雨夜の品定めの一場面）を重要視する考え方が、鎌倉・室町期の

「テキストは、新編国歌大観編集委員会編『新編国歌大観 第五巻歌合編』（角川書店、一九八七年）を用いた。

源氏学にあり、文明十七年（一四八五年）には、宗祇の手によって、帚木卷のみに注釈を施した『雨夜談抄』が成立した。『源氏物語』の注釈書の中でも、特定の一帖のみを対象とするのは珍しい現象であり、いかに帚木卷が重視されていたかが窺える⁸⁰。これまでの調査の結果、『雨夜談抄』では帚木卷を起点として『源氏物語』全体を見通そうとしていたことが確認できている。

帚木卷を重視する考え方については、既に先行研究によって指摘されている部分もある⁸¹。しかし、鎌倉・室町期の帚木卷に対する享受到対し、どのような意図で、どのような観点で、帚木卷を重視していたのか確認した論考は、未だ確認できない。『雨夜談抄』成立の意義を探索するためにも、帚木卷の享受史を整理する必要があると発表者は考え、帚木卷享受の捉え直しを試みた。その結果、今川範政が『源氏物語提要』で示した考え方を受けて、後代の注釈書が帚木卷を重視している可能性が見い出せた。本発表では、まず『源氏物語提要』が示した帚木卷の解釈と、後発する注釈書がどのように継承したか整理する。

『源氏物語提要』以前

『源氏物語』全体を踏まえた上で、帚木卷をどのように捉えるべきか、という問題意識は古くからあった。現在確認できる最も古い言及は、貞治三年（一三六四年）に成立した『原中最秘抄』⁸²にある。

行阿云、今案云、桐壺更衣早世事を序分として、雨夜品定に六趣四生のことはりをあらはし、それよりすゑぐの巻には夕顔、葵上、紫上等の哀傷に風情をつくし、あはれをもよほし、心をいたましむる事たぐひなし

『原中最秘抄』では、仏教的な付会を施しながら、『源氏物語』の全体構成と、その中における帚木卷の意義について述べている。つまり『源氏物語』は、桐壺巻を序文とし、雨夜品定めでは六趣四生（六道四生）の道理を述べ、以降の巻で夕顔・葵上・紫上などの具体的な女性を登場させるという考え方である。

『源氏物語提要』の成立

『源氏物語提要』は今川範政によって、永享四年（一四三二年）八月に著された梗概書ではあるが、『源氏物語』の和歌を全て取り入れて、詳細な注釈を付している点など、注釈書的な性質も持ち合わせている⁸³。『源氏物語提要』は帚木卷について、次

⁸⁰ 『源氏物語』五四帖のうち、一帖のみを対象として注釈書が作成されたのは、帚木巻と初音巻の二つのみである。

⁸¹ 伊井春樹「第三章第二節『雨夜談抄』と『源氏物語不審抄出』（『源氏物語注釈史の研究室町前期編』、桜楓社、一九八〇年）

⁸² テキストは、池田亀鑑編著『源氏物語大成』（第十三冊資料編、中央公論社、一九八五年）を使用し、便宜上句点・濁点・傍線などを私に施した。

⁸³ 伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）

のように述べている⁶。

此巻は歌を取て名とせり。源氏十六歳の事也。物語の沙汰に此巻を賞る也。上の巻にては御殿をとりて名とす、是は帝と更衣の名也。二の巻は歌をもつて名とせり。そのはらやふせやにおふるは木々^々のといふ歌の心也。人間の上もは木々の有無の理なるべし。①此巻は物語の序分也。又一部の大綱成べし。②又此物語は法華經をもすると云り。されば此巻、法花經の二の巻譬喩品也。人の心のさまぐ成を物の品にたとへり。是則いづかたへもおとしつけぬ筆法也、譬喩品に事叶えり。うつせみの君ありながら源氏に逢奉らぬは、簀木のたとへによくあへり。簀木といへるは、森の木末などの簀に似たる物の遠くより見えて、ちかくよればなし、雲霞の気のごとくなる物なり。よつて有無のたとへにひけり。③此物語にいへる所の人々、栄花を見せてまたおとろへをかけり。世間の有様、皆簀木々にはじまり夢の浮はしにおはる也。天台の両亦門の法文、爰にかなへり。

(中略) ④此品さだめ十八段有。

引用部からは、帚木巻を次の四つの観点から捉えていることが窺える。

①帚木巻は『源氏物語』の序文であり、大綱(根本)である。

②帚木巻を『法華經』と結び付けている。雨夜の品定めで、様々な性質の女を挙げながら女性論が展開していく様を、譬喩品と似通うと捉えた。

③世間は、帚木に始まり夢浮橋に終わる儚いもので、天台四門に叶うものである。

④雨夜の品定めは十八段に区分できる。

①②④の説に関しては、『源氏物語提要』以前のものからは窺うことのできない考え方である。しかし、③の説に関しては、先行する注釈書で既に言及されている。四辻善成の『河海抄』では、『源氏物語』雲隠巻に対して天台四門を踏まえて注記しているのだ。そのため、『河海抄』の注記から着想を得て、書き記したと考えるのが妥当である。つまり、先行する注釈書が別の巻の注釈を施す際に著した考え方を、帚木巻と結びつけて解釈している。単に帚木巻を注釈するだけでなく、『源氏物語』全体を捉えようとする姿勢が確認できる。

『花鳥余情』『雨夜談抄』への継承

『源氏物語提要』で示された解釈を受けて著された注釈書がある。一条兼良の『花鳥余情』と宗祇の『雨夜談抄』である。

稲賀敬二編『源氏物語提要』(源氏物語古注集成第二巻、桜楓社、一九七八年)

※テキストは、稲賀敬二編『源氏物語提要』(源氏物語古注集成第二巻、桜楓社、一九七八年)を使用し、便宜上句点・濁点・傍線などを私に施した。

※テキストは、伊井春樹編『松永本 花鳥余情』(源氏物語古注集成第一巻、桜楓社、一九七八年)を使用し、便宜上句点・濁点・傍線などを私に施した。なお、『花鳥余情』は文明七年(一四七五年)から文明十年(一四七八年)にかけて段階的に成立した。

※テキストは、中野幸一編『明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』(源氏物語古注釈叢刊第四

まず、『花鳥余情』の注記を確認すると、以下のような注記が確認できる。

なりのぼれども、もとよりさるべきすぢならぬは

これよりは十八問答あり これは第一段馬頭の詞也

いまはたゞしなにもよらじ かたちをばさらにもいはじ

三界唯一心万法唯識の心也 源氏一部の肝心こゝにあり

「これよりは十八問答あり」と、雨夜の品定めを十八段に区分している。この部分は、『源氏物語提要』④の説を継承していることが窺える。また、「三界唯一心万法唯識の心也 源氏一部の肝心こゝにあり」の部分については『源氏物語提要』③の『法華経』と結び付ける説から示唆を得たものであろう。

一方、『雨夜談抄』では冒頭部において、次のように述べている。

これのみならず、ところ／＼に物をなすらふる事かぎりなし されは五十四帖こ
と／＼ある物かとみればなく、なき物かとすれはある物なれば、此は／＼き木一
部の名になる物なり 天台に四門をたつる中にも、亦有亦空門このものがたりに
あたれり 夢のうき橋の巻もその一卷の名といへども、五十四帖の名になる物な
り（中略）此物語はいにしへの夢そともいひがたく、此世にあるわれ人の今の身
のうつゝともさためがたく、ともに夢のわたりのうきはし、は／＼き木のありなし
なり さればむらさきしきぶの筆の跡、その色ふかくその心はかぎりなき物なり
傍線部を見ると、『源氏物語提要』③の説で提唱していた『源氏物語』と天台四門を
結び付ける考え方を受けている。また、『源氏物語提要』が先行する注釈書が他の巻
に施した注記を帚木巻に結び付ける論じ方や、帚木巻だけでなく全体を見通そうとす
る考え方も継承している。

一見すると、別々の考え方をしているようにも見受けられるが、両者の学問の源流
が『源氏物語提要』という同一のものであることが確認できる。

まとめ

これまで、鎌倉・室町期の源氏学については「一つは兼良の流れに、一つは宗祇の
流れにと別々に受けつがれて行っている⁹⁾」と、二つの対立する学問の系統が想定され
ていた。しかし、本発表では両者の説の源流が、同一のものであることが明らかとな
った。このことから、異なる系統の学問ではなく、大きな枠組みの中の一つの学問と
見直すことができるのではないかと考えている。帚木巻を重視する説の検討を通し
て、新しい鎌倉・室町期の源氏学の捉え方を提唱したい。

巻、武蔵野書院、一九八〇年）を使用し、便宜上句点・濁点・傍線などを私に施した。

⁹⁾ 注3 稲賀氏論考に同じ。